

脳卒中、スマホで救え CT転送し診断 石川・能登で開始

(2012年5月12日)【北陸中日新聞】【夕刊】【その他】

早期治療、不要搬送防止 「1時間近く早い」



スマートフォンを使ったシステムの利便性を話す東医師＝石川県七尾市で

スマートフォン（多機能携帯電話）を使って脳卒中患者のコンピューター断層撮影（CT）画像を病院間で伝送、専門医が診断するシステムが、厚生労働省の支援を受け全国で初めて石川県能登北部で始まっている。急性期の治療が重要な脳卒中患者の容体を少ない専門医でいち早く診断できるほか、不要な搬送を避けることで、患者だけでなく医師への負担軽減も期待されている。（宮畑 譲）

能登北部の同県輪島市と能登、穴水両町には脳神経外科の専門医がいない。脳卒中の患者を各地の病院で受け入れた後、専門の治療が必要な場合は、珠洲市総合病院、公立能登総合病院（七尾市）と恵寿総合病院（同）の3病院のいずれかに搬送している。これまでは、撮影したCT画像は患者と一緒に搬送し、転院先に到着後、専門医が診断していた。

新しいシステムでは、脳卒中患者が運ばれた病院で撮影したCT画像を専用のサーバへ送る。その後、連絡を受けた専門医がスマートフォンで画像を診断する。

休日や時間外でも医師が携帯するスマートフォンで画像を見て瞬時に指示や準備ができ、治療までの時間が大幅に短縮できる。

脳卒中は早期の治療が後遺症の有無などを大きく分ける。少しでも早い処置が肝心だ。システムが稼働した3月、専門医のいる病院へ10人の患者が運ば

れた。

「いくら電話で聞いても詳しい容体は伝わらない。画像なら正確な判断ができ、これまでより1時間近く早く治療できる」。システムの構築に携わった恵寿総合病院脳神経外科長の東壮太郎医師（58）が利便性を強調する。

京都大病院では院内の医者同士でスマートフォンによる情報共有システムはあったが、地域の病院間が連携しての仕組みは初めて。厚労省の地域医療再生施策の一環で補助を受けて運用している。

東医師によると、2010年度、能登全体での新規脳卒中患者の数は839人。だが、このシステムを運用する範囲では、脳神経外科医ら専門医は10人しかおらず、すべての患者を受け入れては医師の負担が大きい。画像を診断して搬送が不要なケースをあらかじめ避けることができるようになった。

専門医が少ない地域で複数の病院が連携して脳卒中患者の治療に当たるこのシステムは、医師不足が進む全国の過疎地に広がる可能性もある。東医師は「各地域の実情に合うようにすれば、利用できる場所はたくさんあるはず」と話し、地域医療の先駆的事例にと意気込む。

関連情報

この記事のジャンル：[心臓・脳血管](#) > [脳血管の病気](#)

同じジャンルの最新ニュース

[四日市病院に東海初のハイブリッド手術室 患部の映像鮮明に](#) (2012年5月3日) 

[生活向上に最適な訓練は 岩砂病院・岩砂マタニティ 森憲司さん](#) (2012年4月24日) 

[信州の病院〈6〉 昭和伊南総合病院 駒ヶ根市赤穂](#) (2012年4月3日) 

[仙台の男性 震災後、髄膜炎と脳梗塞発症 不安…救われた](#) (2012年3月23日) 

[静岡の病院〈30〉 藤枝平成記念病院](#) (2012年3月18日) 